

巻頭言



30周年記念事業に思う

三木 彬 生†



会員の皆さまにはすでにご承知のとおり、当学会は来年4月22日で30周年を迎える。これにともなって、30周年記念事業が計画され、多数の方々がこの準備に向けてボランティア活動を重ねておられる。記念事業の趣旨と内容については、本誌3月号を参照していただきたい。ところが最近、記念事業の実行委員会の有力メンバの一人であるS氏にお会いしたところ、彼は“どうも30周年、30周年といいながら、騒いでいるのはごく一部で、一般の学会員にはほとんど関係のないことなんだね”と嘆いておられた。

彼の指摘は、対象を筆者自身に置き換えて見れば正に凶星である。筆者も、総務担当理事などという、身にふさわしくない仕事をしていなければ、“一般の”会員として記念事業を縁遠いものとして受け取っていたであろうから。

30年前に約300人でスタートした学会が今は3万人を超える大学会に成長した。この間の変化は、7月号の巻頭言の中で述べられている。それによると、会員構成が、昔は大部分を占めていた研究者（大学の先生、研究機関勤務者）が今は1/4弱となり、約半数がコンピュータ関連機器のメーカー勤務者、残りがソフトウェアハウスやユーザとなってきた。また学会員の平均年齢も、ここ数年間はほぼ変わらず36歳*という若さを維持している。これが学会誌が難しすぎるという声となって現れているという。もっともこれに対しては、決してそうではないという意見もあって、一概には言い切れないが、いままで学問の先端で学会を引っ張り、その活動を支えてきた母体が少数となり、学会に対して今までとは異なったサービスを要求する会員が増えてきたことは確かである。要するに学会の発展につれ、会員の構成が多極化してきているのであろう。このような傾向が、30周年記念事業に限らず、研究会や学会誌に対する無関心層の増加を招いていると

いえよう。

創立以来30年間、社会の情報化の推進役として当学会は大きな役割を果たしてきた。一部の人が使えたコンピュータの恩恵を、今ではあらゆる人が意識するとなしに問わず享受するようになってきている。キーボードアレルギーの中年に代わって、ファミコンやパソコンで育ってきた若い人達がもうすぐ社会の前線に出てこようとしている。一方社会は国際化が進展し、日本にも経済ばかりでなく、学問の分野でも指導的立場が求められるようになってきている。

このような中で行われる記念事業は、すでに114編の応募をみた記念論文の募集のほか、学会のこれまでの歩みを振り返り、将来の方向を見通す記念出版、国際化の指導的役割を占う国際会議Info Japan '90の開催、学会の将来の活動に対する提言を目指す未来委員報告など、ある意味では、学会の体質改善、世代の交替を示唆する意義深い企画となっているといえよう。特に国際会議は平成2年10月1日より京王プラザホテルで開催が予定されており、本事業の挿尾を飾るイベントとなっている。

先にも述べたとおり当学会は、他の学会が高齢化に悩む中で、ひとり若さを誇っている。これは情報産業の若さを示していると同時に、学会がそのような産業構造を反映していることの現れといえる。また、研究グループ制の試行により、音楽情報科学といった今までの学会では考えられなかった研究組織が誕生するなど新しい動きが出ている。今後もユーザやソフトウェアハウスの会員にも興味を持って、かつ積極的に参加のできる活気のある学会を目指していただきたいと思う。さしあたりは、国際会議への投稿（締切2月1日）を期待している。

30年はほぼ世代の交替の1周期に当る。今回の記念事業を、学会の再誕生の一つの契機としようではないか。
(平成元年10月11日)

† 本会理事 (財)鉄道総合技術研究所

* 7月号巻頭言には間もなく31歳とあるが、その後統計の取り方に誤りが発見され、この数字となった。